

教育委員会会議録

令和6年（2024年）6月定例教育委員会会議

開 会 日	令和6年（2024年）6月27日（木）	
開 会 時 間	午後2時00分 ～ 6時32分	
開 会 場 所	SPRING熊本花畑町 7階 D会議室 ※一部オンライン開催 オンラインでの出席者については各執務室	
出 席 者	委員会	遠藤洋路 教育長 小屋松徹彦 委員 西山忠男 委員 苦野一徳 委員 澤栄美 委員 村田慎 委員
	事務局	須佐美徹 教育次長 小島雅博 教育次長 中村順浩 総括審議員兼教育総務 部長 福田衣都子 学校教育部長 他
提 出 議 案	議第38号 熊本市部活動改革検討委員会委員の委嘱について 議第39号 令和7年度（2025年度）熊本市立高等学校入学者選抜の基本方針の策定について 議第40号 熊本市会計年度任用職員の給与及び費用弁償に関する条例第19条の規定に基づく教育委員会が給与を定める職員等に関する規則の一部改正について 議第41号 熊本市いじめ防止等対策委員会委員の委嘱について 議第42号 令和7年度（2025年度）熊本市立平成さくら支援学校入学者選抜の基本方針の制定について 議第43号 熊本市立学校情報セキュリティ対策基準の改定について 議第44号 職員の懲戒処分について 議第45号 職員の懲戒処分について	
協 議	令和9年度高等学校入学者選抜について	
報 告	（1）令和7年度（2025年度）熊本市立学校管理職等採用選考試験について （2）「令和5年度生徒指導状況報告」の結果報告について	
自 由 討 議	山吹小学校の取組について	
署 名	小屋松 徹彦	
	澤 栄美	
会議録作成者	教育政策課 有働 真帆	

令和6年（2024年）6月 教育委員会会議録【6月27日（木）】

[開会の宣告] 遠藤洋路 教育長	令和６年６月定例教育委員会会議を開会いたします。
[会議の成立] 遠藤洋路 教育長	本日は、私のほか５人の委員が出席しておりますので、この会議は成立しております。 会議録署名人は、小屋松委員と澤委員とします。
[公開の審議] 遠藤洋路 教育長	本日の会議の内容につきましては、会議日程のとおりですが、 本日の議事のうち、議第４４号及び議第４５号　職員の懲戒処分については、会議規則第１３条第１号「教育委員会に属する職員 の任免その他の身分取扱に関する案件」に該当することから、また、協議（１）令和９年度高等学校入学者選抜については、私立高校における検討状況に関する正式公表前の情報が含まれてお り、会議規則第１３条第４号「その他の案件」の非公開事由に該 当することから、非公開の審議が適当と思います。
	議第４４号、議第４５号、協議（１）につきまして、非公開に賛成の委員は、挙手をお願いします。
	（全員挙手）
遠藤洋路 教育長	全員賛成により、議第４４号、議第４５号、協議（１）は、非公開とします。
日程第１　前回会議録承認	
遠藤洋路 教育長	５月２３日開催の令和６年５月定例教育委員会会議録を各委員のお手元に配布しております。この会議録を承認することに、御異議はありませんか。
	（異議なしの声）
	異議なしと認め、前回会議録等を承認することに決定します。

日程第2 事務局報告

- ・（1）事業・行事等報告について

日程第6 自由討議

- ・テーマ「山吹小学校の取組について」

《 西澤佳代子教諭 犬飼倫友希主幹教諭 名古屋市立山吹小学校 オンライン説明》

西山忠男 委員

教育委員の西山と申します。丁寧なご説明ありがとうございました。

非常に興味深い内容だったんですが、山吹セレクトタイムについて教えていただきたいと思います。

自由進度学習で複数教科の自由学習であるということで、生徒さんたちがそれぞれ自分の決めた学科を勉強しているように思うんですけど、先生からしてみると一度に生徒さんがいろんなことを勉強しているので、例えば質問が出たときに直に対応できるのかとか、先生の指導力が非常に問われるような気がするんですね。全くほっておくわけではないんだろうと思うんですけど、そういう一斉にいろんな科目を生徒さんがやっているときに先生はどういう指導をしているのか教えていただけますでしょうか。

西澤佳代子 教諭

ご質問ありがとうございます。

4教科、国、社、算、理を一度に生徒たちが選択してやっているということで、よくそのようにいつも質問されます。先生、それ、大変じゃないか、困らないかと。私たちは教えるという従来の形から、こどもが学ぶ、学ぶこどもを育てるところを根っこに置いて見えていますので、1人でクラス32人いるわけですけど、32人のこどもが4教科ばらばらに教えるのに32人先生がいるという考え方ではなく、こどもたちが自分たちで学び進めていけるような、先ほど言った単元進度表や、それから教材を充実したり、それからこども同士をつなぐ、今ここが分からないでいるみたいと、そしてこどもがそれを助けてと誰にどうやって聞きに行ったらいいかということも学びの中のヘルプが求められるという、そういう子を育てるということを全て含んでやっております。あと、先に自分はこどもやっているんだけど、理科の実

	験をやっている子の様子をちょうど家でお母さんが炊事をやっている、包丁をとんとんやっている姿を見ながら自分が包丁を握るときにうまくいくというような感じで、ほかの子の学びを同時に受けるのではなくて、見ているというような場面が自然とできるんですね。大抵こどもたちは最初に自分が取り組みやすい得意なものからやっていきますので、ちょっと苦手なものが残ったときに既に学び進めている子からコツを聞いたり、助けてもらったりと、YSTの中でも協働する場面、誰かの得意をいただいたり、自分の得意を見せたり、むしろ教科の学力の向上というよりは学んでいく力も向上しているというところですので、4教科交じっていないと逆にまずいわけです。1つの教科、算数だけでやっているとできる子、できない子というような形になってしまいます。4教科交じっているところで協働性が生まれてくる、そのような形で進めております。 お答えになっているかどうか、またご質問いただければいいかと思います。よろしくお願いいたします。
西山忠男 委員	ありがとうございます。 生徒さんの学ぶ力を育むという取組は非常に素晴らしいと思うんですけど、やっぱり今まで普通の授業をやっている観点からすると、例えば新しい単元をこどもたちが自主的に学ぶことができるのかというところがちょっと気になるんですね。既に学んだことの復習だったらいいと思うんですけど、算数の新しい例えば分数の計算とか自分でやりなさいと言って教科書を読んでみるけど、全然分からないといったような生徒さんも出てくるんじゃないかと。それでだんだん生徒さんによって進度の違いが出てきやしないかなという心配もするんですけど、そのあたりは大丈夫なんでしょうか。
西澤佳代子 教諭	ありがとうございます。 進度の違いが逆に言うと違いがあるという、みんな同じでないというところをしっかり感じ取ってこどもたちが感じてほしいなと思うんですね。みんなが同じペースで同じようにゴールに向かうということ自体、じっくり考えたい子や、もうここは簡単でさっと進みたい子を同じペースで待たすようなことになってしまいます。国語は得意だけど、算数は苦手で、国語、これは8時間ぐらいで終わるような単元がその子だったら2時間ぐらいで終わり、算数が5時間ぐらいで終わるような単元をその子が国語

	で浮いた時間を持ってきて8時間ぐらいでできるというような部分とか、それから1人で学び進められる子がいるので、一斉授業のときにはどうしても見落としがちなことたちに寄り添って支援していくということができていくというよさがあります。 もちろんやりなさいと、ぱっと教科書を見て、単元表を見てというふうではなくて、先ほどもありましたインストラクションというのが単元の初めであったり、それから途中であったりというふうに入れてあります。それから途中の中でこのことを分かった子は何人の子かに説明していく、説明ができるように説明を聞いてもらう、そのときにはまだそこをやっていない子に聞いてもらうとか、もう既に終わった子に聞いてもらうとかいうような形で、その単元のところにいろんな子が交じるように意図して進度表もつくってあります。 なので、さあ、やりなさいというふうにぼんと放任で出しているわけではないです。一人一人の子がどんなふうにその道をゴールに向かっているかなという伴走者という形を常にとっているように心がけています。
西山忠男 委員	非常によく考えられた取組でとても参考になりました。ありがとうございました。
苦野一徳 委員	先生方、ありがとうございました。 西山委員が多分一番気になっていらっしゃるのが、そして今回、山吹小学校の先生方に取組を聞かせていただく大きな目的の一つがインクルーシブ教育だったと思いますので、山吹小学校でインクルーシブ教育、特性があろうがなかろうがみんなであいいう形だと一緒に学べるという実態をぜひお聞かせいただければと思うんですけど、お願いします。
西澤佳代子 教諭	今年、まさに32人のこどもの中、中国から来まして日本語が全く分からない状況でいる子だとか、自閉症スペクトラムの診断も下りているよ、ADHDもあるよというような知的も2学年以上ちょっと学力的に難しいところがある、それから感情のコントロールが難しくて様々な子が32人いたら32通りの形にいるという、その違いがあって私たちはその違いの中からどうやってお互いを協調し合って学んでいるんだという、その意味で本当に4教科をあえて一斉に学ばないことの選択をしました。これがちょうどマッチングプロジェクトのイエナプラン教育、令和3年、

4年、5年で来たところのイエナプランのいいところ取りをしたと思うんですけど、学校教育の中で学力をつけるということをそれを通して人育てています。それぞれその子のそれは長所なのか、短所なのかということじゃなくて、その子の個性であり、それをどのように使うかです。とても時間にこだわりのある子が時間時間ということではほかの子を苦しめるようなことになればそれは駄目だけど、でもその子が時間にこだわりがあることで、ある時間のところでみんなにこんなふう動こうよと全体に投げかけられるような、ありがとう、声をかけてくれてという、そういうような場面がお互いのその子の個性を生かし合えるような場というのを常に考えながら、YSTに臨む前のところの本当に学級経営、当番活動だとか、係活動だとか、そういうところに必ず自己選択、自己決定を入れてお互いのこうしたい、ああしたいという自由な思いを話し合わせるんですね。そうすると大人たちは面倒にならないようにこっちが決めてばばぽっというと思ってやっているんですが、それは本当に決められたことで子どもたちはその後の行動について全く責任を取ろうとしない、先生が決めたこと、自分たちが決めたことがうまくいかないとき、そういうときにもどうしてうまくいかなかったのかな、このときこういうふうにしたらもっといけたかもしれないという次につながる、そういう振り返りをしていくんですね。

誰かのこうしたいを、あの子いつも譲ってくれているから、今日はあの子のやりたいを一番にやってあげようよとか、この間こんなふう決めたけど、2人の子のやりたいがやれてなかったからそこからやろうよ、そういうような言葉が出てきます。

なので、違い、みんな違ってみんないいと、私も金子みずぶさんの歌が大好きで言っていたんですけど、苦野先生もよくおっしゃってみえます、そこで終わるんじゃなくて、その違いの中から次の一歩、次、さあどうすると。みんな違っている、みんなが幸せになる方法を考えようよということが実はこのYSTの中でできてるあるいはそういうことができていなければYSTが成立しないです。なので、最初の学級経営、当番活動、係活動を中心としたお互いの違いを尊重し合うということをととても大事にしています。それをしないとYSTというのは成立しないなということを校内でも市内でも話しているところです。

澤栄美 委員

教育委員の澤といいます。よろしくお願いします。

ループリックとか7つのエッセンスとか取り入れておられて、

西澤佳代子 教諭

こどもたちが何のために学んでいるのかというところを理解しながら学んでいるというところ、すばらしいなと思いながら聞かせていただきました。

今、令和3、4、5年でということでおっしゃったんですけど、それまでは通常、一般的な学校でやっているような授業をされていたと思うんですけど、変わってから保護者も不安になられたとかいうのが最初にあったと思うんですけど、今の学習をし始めてから変わったなと、こういうところがこどもたちのこの様子が変わったとか、先生方の向かい方が変わったとかいろいろ変わったにもあると思うんですけど、こういうところが変わったというところを教えていただきたい。それは課題も含めて教えていただきたいというのが1つと、それから私はキャリアフェスティバルが面白いなと思って見ていたんですけど、このキャリアフェスティバルの働くチームとお金を使うチームだったと思いますが、そういう発想はこどもたちの中から出てきたのかというところを教えていただきたいと思いました。よろしくお願いします。

こどもたちの変容はずばり、最初は、先生、トイレに行っているですかに始まり、何をするにも先生、何々しているですかという許可を得るような、もちろん教師もこういうことをしていいですよ、ああいうことをしては駄目ですよというルールからいろいろなことを押しつけていたのかもしれないなという、こちら側のそのところから、トイレに行ってきます、安全面で急にいなくなると困るので、別に放課じゃなくても授業のときでもトイレに行ってきますと出ていき、抜けた間の時間をまた自分が学びにつなげていくというようなところで選択するという自己選択、自己決定というところが非常にできるようになりました。その結果、自分の行動の結果を人のせいにならずに、自分のものとして次どうするかということまで考えられるようになっています。これが学びの場面、学校生活の場面、友達とけんかをしたときなどにそういう姿が見えてきています。

ただ本当に教師自身が今までは教えるとか、こういうふうにするんだよと全部面倒なことにならないように、こどもがうまく流れるように段取りしていくというような習慣がどうしてもあったものですから、教師の姿勢自体がマインドをまず変えていくというところが今もこれからも課題になっていくかなと。そういう環境の中でこどもが自己選択、自己決定ができていくのかなというふうに思っています。

犬飼倫友希 主幹教諭

令和3年度から正式にマッチングプロジェクトの実践モデル校として取組が始まりましたが、その前の年に令和2年度のときにイエナプランのことを学んできた先生がその学年でちょっと始めたりもしてまして、全体で始まったのが令和3年度からというふうになります。

保護者の方も、私、昨年度から来たので生で見ていたわけではありませんが、保護者の方も戸惑い、何をしているか分からないといったところが戸惑いがあったというふうに聞いています。コロナ禍でしたので授業参観が開けなくて授業の様子を見ていただけなかったところも難しいところではあったというふうに聞いていますが、そういったところで家庭教育セミナーなどで直接校長から保護者の方へ取組の意図を伝えたり、現在も担任の先生からおたよりのようなものでこういったことをこういう意図で取り組んでいますよ、おうちの方から何かあればメッセージくださいねというふうに双方向で情報のやり取りをして共通理解を図っているところです。

キャリアフェスティバルについて、キャリアフェスティバルで働くブースというアイデア自体は教員のものによりますが、こどもたちには、ただのお仕事ではなくて、キャリアというのは生き方とか歩んできた足跡だよといったこともしっかり教えて、おうちの人の家事も大事な仕事なんだよと様々な観点でキャリアということを描えられるようにしました。その結果、いろいろなお仕事体験ブースのアイデアが浮かんできて充実した活動になったと思います。

遠藤洋路 教育長

ありがとうございました。

残り時間が少なくなりましたので、小屋松委員と村田委員、続けてご発言をお願いします。

小屋松徹彦 委員

教育委員の小屋松です。ありがとうございます。

私も今のキャリアフェスティバル、非常に興味があったんですけど、このキャリア、仕事をどういうふうにして決めていかれたのかなということを知りたかったのが1つ、最終的にはこれは仕事をしてお金をもらって、そのお金で多分遊ぶという一つの流れになっているのかなと思いましたが、すみません、具体的にもう少しお聞き願えたらというのが1点。

もう一点は、非常にこどもたちの中でも積極的に話ができる、発言ができる子となかなか発言できない子、いろいろいると思

	ますし、これが異学年になってくると余計にそういったものが顕著に出る可能性もありますけど、学校では心理的安全性を高める学級、学校づくりというのをされていて、この集団の中できちんと自分の意見を話せたり、気持ちを表したりということを心がけてできるようにしているというふうにおっしゃっていましたが、これをどうやって例えば発言がなかなかできないこどもたちにどういう働きかけをして、この心理的な安全性というか、こういったものをつけさせていっていらっしゃるのか、そこら辺をお聞きしたいと思います。
村田 慎 委員	教育委員の村田と申します。本日はありがとうございました。 私からは、先ほど澤委員の質問の中にありましたけど、保護者のほうの理解を得ていくまでということで、その過程、いろんな場でコミュニケーションを取られてご説明の場を設けてお話をされたというのをお聞きしたんですけど、逆にこの取組を始めるときのほかの先生方にとっても理解というか、これまでの1人で全員に一度に同時に教えるというやり方から全く違うやり方に少しずつ変えていくまでの先生方の順応というか、対応の理解を得るのにどういうふうなコミュニケーションを取られたのかなというのをお聞きできればと思います。
遠藤洋路 教育長	大きく分けて3つほどあったかと思いますが、お時間許す限りで結構ですので、お願いいたします。
西澤佳代子 教諭	最後のまず先生方の理解というところなんですけど、まずはこんなふうにやってみようということで本当に学年でたくさん話をしたり、学年間を越えてどんなふうに行っているかという先生たちが対話をします。本当に職員室で普通にお茶を飲んだりしながら対話をしていきます。それから授業もお互い見に行ったり、YSTをやっているときも、こんなふうに行っているんだけど学年でこどもたちも、4クラスいたら4クラスをシャッフルしてYSTをそれぞれの違う教室でやってみるというようなことをしたりして、互いの学級以外のほかのこどもたちから刺激を受けたり、こんなやり方がいいねと、こういうふうだったら安心できるねということをしてきました。 やっぱり先ほど心理的安全性という部分が先生たちも心理的安全性が保障されていないといけないので、今、自分はどんなことを不安を抱えているのかとか、こんなことだったらできそうだけ

犬飼倫友希 主幹教諭	どとかいうところで、先生方もできそうなところから徐々にステップでやっていきます。
	なので、方法をもらって方法から入ってみようという先生もいれば、いや、そうじゃなくて自分はちょっと根っこのところで、Y S Tという形ではなくて従来の形を取りながら、そこで安心したところで次のステップへ行くということもたちの選択も大事にももちろんしているので、先生たちの選択も大事にしていこうということで、こういうことをやるので全員やらなければ駄目という形は取りませんでした。
	そして徐々に徐々に取り組んでいるクラスのこどもたちが自己選択ができ、自分の意思を述べたり、とても楽しそうに教室でしている姿を見て、そのこどもの変容を見てどんなふうにそれをやったらいいのかなとこどもの姿から学んでいったということが大きかったと思います。
	心理的安全性を育んでいく教室をつくる中では、マッチングプロジェクトでイエナプラン教育のほうでしたときにはサークル対話だとか、それからアドベンチャープログラムをYAPというんですけど、こどもたちの関係づくりをするような学活での取組、こういうものを異学年のふれあい活動でも取り組んでいっています。
	3年の子は1・2・3年のリーダーになります。そしてまた、今度4・5・6年のふれあいを持ったときには一番下になるんですが、リーダー経験をして上へ行くということは、6年生の気持ちも理解しながら今度は下側に入るという2回のサイクルでやっていくことができるというのも大きな特徴かなと思います。 犬飼先生のほうにつながります。
犬飼倫友希 主幹教諭	それでは、私のほうからキャリアフェスティバルの仕事の決まり方についてお伝えさせていただきます。
	こどもたちにいきなりお仕事を考えてごらんというふうに言ってもなかなか伝わりませんので、本校では今まで活動で取り組んできたことをちょっと生かしたりもしながら発想を広げていきました。
	本校ではキャリアゼミナールという取組を進めていて、保護者の方に学校に来ていただいて、その保護者の方のお仕事、例えばお医者さんとか、エンジニアさんとか、スーパーの何かマネージャーさんとか、お仕事のことを話を聞くという取組をこれまでも行ってきています。そういったこともちょっと発想のアイデアに

遠藤洋路 教育長	入れながら取組を進めるようにしました。 西澤先生が今お話をしたように、こどもたちが近い学年でグループが組まれているというのは本当にすごく大きなことだなというふうに感じていて、1年生、6年生でペアを組むことがよくあるんですけど、そうするとやっぱりお世話をしたりされたりになってしまいますが、1・2・3年の近い学年で、そしてリーダーとフォロワーを経験しながら成長していくというような姿を見ることができています。 すみません、ちょっと慌ただしくなりましたが、よろしくお願いします。 ありがとうございます。 では、お時間となってしまいました。まだまだ聞きたいことはありますが、本日はここまでとさせていただきます。 西澤先生、犬飼先生、大変お忙しい中に誠にありがとうございました。		
<table><tr><td data-bbox="245 1028 458 1128">日程第3 議事</td><td data-bbox="458 1028 1399 1128"></td></tr></table>		日程第3 議事	
日程第3 議事			
・議第38号 熊本市部活動改革検討委員会委員の委嘱について			
《朽木 篤 教育改革推進課長 提出理由説明》 〔採決〕 【原案どおり承認された】			
・議第39号 令和7年度（2025年度）熊本市立高等学校入学者選抜の基本方針の策定について			
《松岡美幸 指導課長 提出理由説明》			
西山忠男 委員	私はこの件、毎回同じことを質問するんですけど、通学区域の学区外入学枠、いつも気になるんですね。この数値が適当なのかどうなのかという、どういう考え方に基づいてこの数字を出してあるのかというのはいつも気になっているんです。 具体的にお尋ねしたいのは、この数字以上の学区外入学希望者		

松岡美幸 指導課長	が実際にあるのかどうかということをまずお尋ねしたいんですが、どうなんでしょうか。 昨年度の必由館の前期でいきますと、学区外は93人の希望者がおりまして、合格内定者が36人となっております。後期のほうは、出願のほうで46人の希望者がおりまして、全体の合格者については、正確な数を確認してもう一度ご報告します。
西山忠男 委員	いや、正確な数は結構ですけど、私が気になったのは、市立学校改革を行って倍率が上がっていますよね。非常にいいことなんですけど、それで学区外からの入学希望者も増えているのかどうかということが1点と、そういう人気が上がったときにこの入学枠をどう考えて設定したのかというこの2点をお尋ねしたかったということです。
松岡美幸 指導課長	学区外の希望者が例年に比べて非常に増えたということは聞いていない状況です。 学区外の入学できる生徒の数については、以前から県教委とか私学協会とかとも共通理解を図りながら学校ごとに一定数の人数を維持しているところでございます。 また、学区外の入学枠については、市民も大きな関心を持っているところでございます。実際に県立高校が学区外を拡大したという際には、市議会において熊本市内の中学生が熊本市内の高校に入学できないので、不本意ながら熊本市外の高校に進学するというので、それを危惧するというご意見があったこともございます。 今回、市立高校学科改編もありまして、少人数教育を行うために総定員を減らしたところでございます。学区外の人数を維持するというので、総数は減ったんですけど、人数を維持するというので、これまでの学科・コースにおける学区外からの志願者の実情に合わせて、学科・コースごとに割合を変えるという調整を行ったところでございます。
遠藤洋路 教育長	それでは、ほかにご発言がなければ採決を行います。 議第39号 令和7年度（2025年度）熊本市立高等学校入学者選抜の基本方針の策定について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。

遠藤洋路 教育長	(異議なしの声) ご異議なしと認めます。 議第39号については原案のとおり決定いたします。
〔採決〕 【原案どおり承認された】	
・議第40号 熊本市会計年度任用職員の給与及び費用弁償に関する条例第19条の規定に基づく教育委員会が給与を定める職員等に関する規則の一部改正について	
《上村 清敬 教職員課長 提出理由説明》	
〔採決〕 【原案どおり承認された】	
・議第41号 熊本市いじめ防止等対策委員会委員の委嘱について	
《吉里 麻紀 総合支援課長 提出理由説明》	
〔採決〕 【原案どおり承認された】	
・議第42号 令和7年度（2025年度）熊本市立平成さくら支援学校入学者選抜の基本方針の策定について	
《野田建男 特別支援教育室長 提案理由説明》	
西山忠男 委員	これまで2次募集を実施したことはございますでしょうか。
野田建男 特別支援教育室長	2次募集をこれまで実施したのが平成29年度、30年度、それと令和3年度と3回行っています。
西山忠男 委員	分かりました。 いや、2次募集をする必要がないほど希望者が多いんじゃないかなと思ったんですが、必ずしもそういうわけではないわけですね。

令和6年（2024年）6月 教育委員会会議録【6月27日（木）】

野田建男 特別支援教育室長	そうでございます。年によってこどもたちの数も違いますし、また、希望者もどこを希望するかというところで、人数が年々で違っております。
遠藤洋路 教育長	それでは、ほかにご発言がなければ採決を行います。 議第42号 令和7年度（2025年度）熊本市立平成さくら支援学校入学者選抜の基本方針の制定について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。 （異議なしの声）
遠藤洋路 教育長	ご異議なしと認めます。 議第42号については原案のとおり決定いたします。
〔採決〕 【原案どおり承認された】	
・ 議第43号 熊本市立学校情報セキュリティ対策基準の改定について	
《吉田潔 教育センター所長 提案理由説明》	
苦野一徳 委員	ちょっと具体的にイメージがなかなかつかないところもあるので教えていただきたいんですが、重大な変化等は例えばどういったことがあるんでしょうか。そしてそれに対してどういう対応が考えられるのかなどお聞かせいただければと思います。
吉田潔 教育センター所長	重大な予想されることに関しましては、今後クラウド環境に移行していくことが予想されておりまして、それは変化がとても激しい状態でございます。今のところ大きなセキュリティ事案はないのですが、そういう大きな変化が見込まれる場合が想定されておりまして、さらには、今、重要性分類を1から4まで分けているのですが、その考え方自体もそれによって変えていかなくはいけない場合が出てきますので、その都度、その変化に応じて迅速に対応するための今回の改定をお願いするところでございます。よろしいでしょうか。

遠藤洋路 教育長	今、所長が説明したように、何か事案があった場合ということもそうですし、例えば新しいサービスを導入するとかあるいは今導入しているサービスの仕様が変わりますとか、厳密にいうところのセキュリティ対策基準上は抵触するんだけど、かといって改定までの間、それを止めるわけにもいかないといった場合には暫定的に運用して、次の教育委員会会議に報告すると、こういう運用ができるようにするということですね。
西山忠男 委員	全体の組織体制が分かりにくいんですね。13ページに一応組織図があるんですけど、これだけでは分かりにくいところがあって、例えば教育情報セキュリティ委員会という12ページに定義してある委員会とか、教育情報セキュリティの統一の窓口、教育CSIRTとか、そういうところはどこにどう関与、そうか、あるのか、なるほど。教育CSIRTは書いてありましたね。もう一つのほうはありましたか、セキュリティ委員会はこの図ではどこに位置するんですかね。教えてください。
吉田潔 教育センター 所長	ページ数でいいますと、13ページの上の図の中のセキュリティ委員会は赤の点々で囲まれているところがセキュリティ委員会に位置しているところでございます。
遠藤洋路 教育長	ちょっと赤系統の色が重なっているので、目立たないのかもしれないですね。
西山忠男 委員	分かりました。
遠藤洋路 教育長	では、ほかにご発言がないようでしたら採決を行います。 議第43号 熊本市立学校情報セキュリティ対策基準の改定について、ご承認いただくことにご異議ありませんでしょうか。 (異議なしの声)
遠藤洋路 教育長	ご異議なしと認めます。 議第43号については原案のとおり決定いたします。

〔採決〕 【原案どおり承認された】

日程第5 報告

・（1）令和7年度（2025年度）熊本市立学校管理職等採用選考試験について

《上村清敬 教職員課長 報告》

西山忠男 委員

今ご説明のあった女性優先枠の話でございますが、大学でも女性教員を増やすために女性優先公募とか女性限定公募を実施しています。そういうことを実施すると必ず男性教員から反発が来るんですね。それはちゃんと我々が説得してやっているわけですけど、市の学校の中で男性の意識が今どれくらいあるのかというのが私としてはちょっと気になるんですね。

世界ジェンダーギャップ指数というので日本は118位でした、2024年。118位ですよ。だからこういうことを改善して、いわゆるジェンダーイコリティーを実現しなきゃいけないというのが大きな世界の流れになっているということをやはり全教員が意識する必要があるんですね。そうしないと女性優先枠というのは何だと怒り出す男性教員が必ずいますから、その辺の意識改革というのをやる必要があると思います。単に枠を設定したというんじゃなくて、そういうことも考えていただきたいと思います。

上村清敬 教職員課長

現状におきまして圧倒的に男性が多いという学校現場がございますので、とはいえ、そのようなご意見が出ることも予想されます。委員おっしゃるような丁寧な説明を心がけて、男性教員からもそのような反発がないように丁寧に進めてまいりたいと思っております。

澤栄美 委員

誰かに聞いて分かることではないのかもしれないんですけど、受験者数自体が女性が少ないんですね。これは何ですかねと、受験者数を上げるためにはどんなことをしていったらいいと思いますか。

上村清敬 教職員課長

やはり先ほども申し上げましたとおり、教頭は大変という認識は皆さん、実際に勤務時間にも表れておりますように、40代ぐ

	らいになりますと当然子育てもまだ真ただ中ということがございますので、やはり教頭の負担軽減が一番の管理職試験を志願する動機にもなろうかと思えますし、とはいえ、そもそも先生になりたくてなられて、管理職になりたくて先生になられたわけではありませんので、その辺の管理職に女性になることによる学校現場の変容である必要性ということを訴えていく必要があろうかと思えます。
澤栄美 委員	40代で大変と、女性だけが大変であることに問題があるのかなと。家庭のことは女性がして、私なんかもそうやってやってきて、どうやってあの時期を過ごしてきたんだろうみたいな、この間本当につくづく思ったんですけど、特に夫が民間企業勤務でしたので、なかなかそういう全体の状況を変えていくというのを教員の中からやっていけたら本当はいいのだろうなというふうにちょっと思ったりもしました。
遠藤洋路 教育長	女性管理職の意見も聞いてみましょう。
福田衣都子 学校教育部長	大変難しいなと思いながら、やはり自分自身を振り返ったときに、自分の人生を大事にしていきたいというところは大きいと思います。教諭、担任の魅力もありますし、それとやっぱり管理職というのは誰もが経験がないところですので、魅力をどう伝えていくかというところは大きいところではないかなと思っております。
澤栄美 委員	実際に経験されている方が声を大にするということですかね。分かりました。
西山忠男 委員	その件に関しては、やはり男性の意識改革が非常に重要ですよね。今、日経新聞にノーベル賞受賞者の本庶佑さんの私の履歴書が載っていますけど、その中に印象的な文章があったんですよ。それは奥さんが子育てを一段落したときに医学部に入り直して医者になりたいと言ったと。それに対して自分は、何と言ったか。研究時間を減らしてまでサポートすることはできないよと言ったそうなんです。それで奥さんは諦めた。そのことを後悔していると書いてあるんだけど、後悔したって遅いですよね。そういう男性が非常に多いというのが今の日本社会なので、それをやっぱり変えなきゃいけないんですよ。少しずつしか変わっていきま

遠藤洋路 教育長	せんけど、そういうことだと私は思っています。 では、ほかにご発言がなければ本件は以上といたします。
・報告（2）「令和5年度生徒指導状況報告」の結果報告について	
《吉里麻紀 総合支援課長 報告》	
西山忠男 委員	暴力行為の発生件数が急激に増えていますけど、これはどういう理由でしょうか。
吉里麻紀 総合支援課長	私たちもそこを大変危惧しておりまして、統計を見ますと同じこどもさんが複数回暴力行為を行っているということであったり、また、学校のほうでもいじめ同様、丁寧に見取りされて積極的に報告をいただいているような状況がございます。
遠藤洋路 教育長	小学校だけ増えているというか、中学校は横ばいな感じにも見えますけど、小学校の暴力行為、全国の統計でも小学校の暴力行為が増えているような結果だったかと思えますけど、これは実際に小学生が暴力的になっているというよりは、その暴力行為の認知が増えているという、そういうことなんでしょうか。あるいは本当に暴力的な小学生が増えているということなんでしょうか。
吉里麻紀 総合支援課長	実際、暴力的な小学生が増えているとは考えておりませんが、ただなかなか言葉で気持ちを伝えることが難しく、そのときにどうしてもお友達とのトラブルの際にもつい手が出てしまうとか、そういったことはあるかと考えております。
遠藤洋路 教育長	小学校が92校あるので、件数を見ると1校当たり年間4件ということですかね。多いと評価するのかなどなのは微妙なところですけど、ちゃんと数えればそのぐらいはあるんじゃないかというような気もしますが、何か数え方が変わっているとかそういうことはあるんですか。
吉里麻紀 総合支援課長	特に数え方が変わっているということはないんですけど、いじめ等も積極的に認知するようなところから、そういったことも間

遠藤洋路 教育長	のトラブルを学校のほうでしっかり見ていただいているという状況はあると考えています。 分かりました。
澤栄美 委員	そのいじめの認知件数なんですけど、これは学年別とかいうのは分かりますか。というのが低学年、特に確かに小学校2年生が全国の統計で多かったんじゃないかなと思いますけど、ちょっとしたいわゆるけんか、そういったものもいじめというふうに本人が言えはいじめになるという状況の中で、どんな感じなのかな、発達年齢的にその辺をどういうふうに理解して、いじめと教員が認定してここに上げてくるわけですけど、そういったところがどう関係性があるのかなというのを知りたいなと思いました。 というのは、私がたまたま公園に孫を連れていっていたら、別のこどもが、うちの孫のことじゃなくて、ロープで編んだようなところを登るような遊具でちょっとそばにいた子に意地悪をしたんですよね、4歳か5歳ぐらいのこどもだったんですけど。そしたらお母さんがそれはいじめよ、やめなさいと言ったんですよ。だからいじめという言葉自体が小さいうちからこどもに入っている。けんかで、そこで私だったら、そういうことをするとお友達がこういうことになるよと言って経験をさせていくということがすごく大事なのではないか、そういう経験がないがゆえに何でもいじめだ、いじめだ、自分が嫌なことをされたらいじめだと、そんなふうになりやしないかなというのをちょっとやっぱり危惧するわけですね。こどもの経験が、暴力に関してももしかしたらそういったところもあるかもしれないなというのも思うんですけど、学年ごとが分かれば教えていただきたいなと思いました。
吉里麻紀 総合支援課長	申し訳ありませんが、定例報告での学年ごとの人数は手元にありますませんが、心のアンケートのほうは先生がおっしゃるようなやはり低学年のいじめが多いというところは統計として出ております。 暴力行為自体も3年生、4年生、5年生がやはり数としては多いような状況があります。
澤栄美 委員	その件については、いろいろ考えるところはあるなと思いつながら、こどものトラブルというのはその子を大きく成長させ

	るためのものなのに、そこを起きないように起きないようにというふうに親も学校もなるかもしれませんが、世間全体がそうになっていっていることをすごく心配をするなというふうに思っています。 別件でもう一つよろしいですか。 不登校対策サポーターが去年から9人増えたということで、これは基本的に中学校ということですよ。この間、ある養護教諭と話をしていたんですけど、大変それは助かっているんだけど、小学校が別室という形は非常に取りにくい。というのが担任の先生が大体授業をずっとしているので、そこに対応する人がいないし、部屋自体がないところのほうが多いというところで、本当は小学校にすごく必要なんじゃないかなというふうなことを言われたんですね。 というのが養護教諭も若返りが進んで、やはり保健室で取りあえずお願いしますみたいな状況があって、それは自分の仕事で頑張らなきゃと思って若い人たちがいっぱいそういうこどもたちを抱え込んでそのほかの仕事ができないとか、保健室はプライバシーに関わる情報が非常にあって、私なんかも経験がありますけど、プライバシーに関わる電話がかかってきたときに、ちょっとすみませんと言って違う部屋に行って、そこを空けた状態でまたその電話をしなきゃいけないとか、そういったこともいっぱいあるので、もし小学校のほうにもとか、そういった計画とかはないのかということを知りたいと思います。
吉里麻紀 総合支援課長	私たちも小学校への不登校対策サポーターの必要性はとても感じております。今、まずは不登校の数が多い中学校のほうに配置しておりますけど、ここでしっかりと効果や実績を出して、ぜひ小学校のほうにも担当課としては配置をしていきたいと考えております。
西山忠男 委員	長期欠席者も令和2年に比べると倍増しているのでちょっと奇妙だなという感じがするんですが、これはコロナの収束と関係あるんでしょうか。もう少し長い時間、スパンで見たらどういう推移をしているのか分かりますでしょうか、暴力行為も含めて。
吉里麻紀 総合支援課長	これは令和2年から推移を出しておりますが、もう少し前からの推移を比べると、やはりコロナ禍の後かなり増えておりますので、何らかの影響があるとは考えております。

令和6年（2024年）6月 教育委員会会議録【6月27日（木）】

西山忠男 委員	コロナの時期だけ減ったというふうに理解してよろしいですか、両方とも。
吉里麻紀 総合支援課長	具体的な数でお伝えします。 不登校の数になりますけど、平成30年度1,283名、令和元年度1,366名、令和2年度1,545名、そこから令和5年度が3,005となっておりますので、減ったというところでもなく右肩上がりにずっと上昇しているような状況があります。
遠藤洋路 教育長	暴力行為もですか。
吉里麻紀 総合支援課長	失礼しました。 暴力行為は令和2年度からになりますけど、令和2年度小学生が57件、中学生が89件でした。令和3年度が小学校が108件、中学校が82件、令和4年度が小学校が240件、中学校が143件、令和5年度が小学校が362件、中学校が152件ということで、やはり右肩上がりに増えているような状況があります。
遠藤洋路 教育長	暴力行為はコロナの前は数えていないんですか。
吉里麻紀 総合支援課長	すみません、手元にあるのが令和2年度からの資料になりますので、またお伝えさせていただきます。
遠藤洋路 教育長	令和2年度以前も数えてはいたんですよね。
吉里麻紀 総合支援課長	はい。数えております。
遠藤洋路 教育長	今、コロナの後しか分らないと。後というか、最中からしか分らないということですね。
苦野一徳 委員	いじめの状況についてのところでお伺いしたいんですけど、早期発見・早期対応につなげるためにも生徒指導主任・主事会等がいじめの認知対応について具体的な事例を基に学ぶことのできる機会を設定するとありまして、今どのような学ぶ機会、その具体的な内容を教えていただきたいと思って、私も澤委員がおっしゃったことを非常に同じように危惧していまして、とにかくトラ

	ブルが起こらないように起こらないように無菌室をつくる、無菌室にする、トラブルが起こったらすぐに先生が介入してうわべはトラブルが解決したように見せかけて、殺菌してまた無菌室にしていくみたいな、こういったものは全国でたくさん私も見て体験してきたんですけど、対応の仕方が本当に教員養成のいろいろと学生たちにも聞いたらトラブル対応を学ぶ機会がそんなにないと言うんですね。現場の先生もどれぐらいあるのかなというのを知りたくて、そのトラブル対応の仕方も本当に一歩間違えれば逆に子どもたちの関係を悪化させたり、親との関係を悪化させたり、そんな悠長なことを言っていられないというところもあるかもしれませんし、もちろん重大ないじめ等に関しては積極的にすぐに介入するということは大事なので、子どもたちが自分で関係性をもう一度築き直すということをさせずに、大人のほうですぐに介入して殺菌するという、これはよりその傾向が強くなっているなという感じがすごくするんですよ。そういう意味でどういう早期発見・早期対応、どういう対応なのかという現状と今後考えていらっしゃることをぜひお聞きしたいなと思いました。
吉里麻紀 総合支援課長	研修等の具体的な内容につきましては、これまでの重大事態の発生状況であったりとか、その内容がどういうことであったということ、双方のいじめとか、特に学校のほうで当初重大な事態と考えておらずにという場合もありますので、こういったこともいじめの重大事態になる可能性がありますということでお伝えしております。その他、新任の先生方にはいくつかの事例を挙げまして、どういう対応がいいのかということを考えていただき、学校の中で教頭先生、校長先生や主任の先生方と意見交換をしていただくような、そういった投げかけをしております。 ただ苦野先生がおっしゃるように、どちらかというところといったこともいじめになりますので、気をつけてしっかり見守りをしてくださいというようなお伝えの仕方にはなっているかなと私自身も思っております。いじめはよくありませんが、もめごとも含めた友達との関係性の中から子どもたちはいろいろ学んでいくところがあるかと思うので、そこをどういうふうに子どもたちに経験させて、なおかつそれがいじめということではなくて、経験として子どもたちの身になるような指導につなげていけるのかというのはすごく課題であると考えています。
苦野一徳 委員	ありがとうございます。

	これはプラスして保護者とも相互理解を図っていかなければいけない問題だと思うんですね。こどもがいじめられたみたいと言ったら、やっぱり親としては冷静ではいられないので、でもよく話を聞いてみると些細なトラブルから少しトラブルが発展しちゃったという、でもここはちょっとぐっとこらえてみるとこどもたちが自分たちで解決できるかもしれないところを私たちがその芽を摘んでいるということは非常にたくさんあるなというのを感じていて、だから保護者ともそのあたりのことを、保護者が例えば学校のこどもたちと日頃から関わっているとまた違ったりしますよね。全然知らない子の話であの子にいじめられたとか言われたら、このやろうと思ったりするかもしれませんが、その子を知っているとまた全然違ったりというのもあって、いかにそういう意味では先生とこどもたち、保護者みんなでコミュニケーションをしていく機会を増やすかというのはすごく大事だと思うので、その場を取り繕うような対応は本当によくないと思うんですね。もうちょっと根本的なところから関係性を築くということで、そういう中に位置づけていけたらいいなというのをすごく思っております。具体的な話じゃなくて恐縮なんですけど、そういった発想は大事だなと思いました。
村田 慎 委員	すみません、お尋ねなんですけど、器物損壊というのはどういうもので、どういうふうに対応されているのか教えていただけますか。
吉里麻紀 総合支援課長	器物損壊の多くは、感情のコントロールができずに物に当たるというケースです。例えばタブレットを投げつけて破損してしまったりとか、窓ガラスに当たって窓ガラスが割れてしまったりとかということになります。生徒指導のところで学校のほうで指導しているところでございます。
西山忠男 委員	先ほどの澤委員と、それから苦野委員の議論に関して私も思うところがあるんですけど、そのさじ加減はものすごく難しいなと思うんですね。特に教師のサイドから見たときに、悪いことをしている子をきちんと叱るというのはやはり大事なことなんだと思うんですね。こどもたちの間で解決させるように導くと、それができれば一番いいんですけど、私が実際体験した例では、息子がもう20年ぐらい前になりますけど、中学校のときに学級崩壊が起こったんですね。どういう状況だったかという、クラ

苦野一徳 委員

スの数人の男子生徒が授業中に勝手に席を離れて遊んだりして授業妨害みたいな行為を繰り返していたのを気弱な女性担任教師が注意しなかったものだから、真面目な生徒たちが怒り出して、もうこの先生は駄目だみたいなことなっちゃって学級崩壊しちゃったんですね。

それで、そのときの校長先生は、私はPTAで会議に出ていろいろな意見を言ったんですけど、親たちはみんな担任を変えてくれと言って、私もそう言ったんですよ。本当に担任を変えてくれました。新しい担任の先生は男性の先生で、もう退職されましたけど、収まったんですよ、きちっと。よかったねと言って卒業した後、息子にどうだったと聞いたら、恐怖政治だと言うんですよ。なかなかこれも難しいなと思って、学級崩壊はもちろん論外だけど、恐怖政治で収めればそれでいいのかというのも、これもまた駄目だなと思ってどうしたらいいんだろうなというふうに感じましたね。感想です。

先ほど子どもたちが自分たちで解決できればというようなお話は、もちろん子どもたちに丸投げするわけでは全くなくて、子どもたちが自分たちで解決できる支援を、手助けをどういうふうに教師の側がそういう手だてを持っているかということとこのスキルをどれだけ学んできたかということで、私はそれほど専門ではないんですけど、しかし、まずい対応をしている現場をいっぱい見てきて、そのまずいやり方もいくつも例はあるんですけど、例えばトラブルを起こした子たちを全員集めて何が悪かったらと思う、言ってみなさい、一人一人が言っていて、自分が悪かったことを言って謝らせるみたいな、もうこれは完全にその場を取り繕うことだけさせて、子どもたち自身がすごくわだかまりを次の争いの火種になる、こういう例もあるし、とにかく何でもいいから言いたいことも全部まず言ってしまいなさいみたいなので、あの子があんなことをして、こんなことをして、そしたらこっちも、いや、それはその前にこんなことがあって、あんなことがあって、いや、あんなことがあって、うわっとトラブルになって、はい、言いたいことを言ったね、じゃ、仲直りしなさいみたいな、こんな例もいっぱい見てきたんですけど、これは本当によくないなと。

そういう場合、ケース・バイ・ケースですけど、例えば一人一人に話、話を聞かずにいきなり謝らせるなんていうケースもめちゃくちゃいっぱいありますよね。一人一人にまず話を聞いて、そ

	の上でよくとても分かった、それでどうしたらいいかという話を聞いて、どうしたらいい、もうあいつとは一生口を利かんとかいう話をするかもしれない。でもやっぱりこれから長い学校生活を一緒にやっていくから、最終的には何がしかの形で折り合いをつけるしかないかなみたいな感じの話に例えばなったとしたら、みんながそういう感じになっていったら、そこで初めて、じゃ、そのために何か場を設定することができるかなみたいな感じで、そこで、教師はこどもたちがトラブルを解決するのを丸投げするのではなくて、それをできるような機会をどうやってつくり上げるか、そのスキルなんですよ。このスキルをどれだけ学んでいるかというところに私はちょっと不安があるというか、少なくとも教育学部では十分できていないんだなということを最近知って、そういう機会を増やさなきゃいけないんじゃないか、スキルなんですよ。これは学べるスキルなので、それを学べる機会を増やしたいなという思いがあるという感じですね。
澤栄美 委員	さっきの山吹小学校の中にもヒントがあると思うんですよ。クラス会議とかそういったことを取り組んでおられて、赤坂真二先生ですかね、有名ですけど、何かそういったこどもたちが苦野先生の前で言うのもなんですけど、民主主義を学ぶような、そういうクラス経営というのが必要で、今スキルとおっしゃったので、こういうことがいじめの重大事故につながりますよみたいな指導が主ですとおっしゃったんですけど、その教育研修の中にそういったことも入れていくというのも大事なかなと思うんですね。 特にさっきの若い女性の先生だったとおっしゃっていましたが、今、本当に若い先生が多くて、やっぱり自分たちもどちらかというところあまりそういうトラブルを起こさずに先生になってきている人が多いと思うんですよ。だからそこは学びの場というのを改めてつくっていくというのも考えた方がいいのかなというふうに今お話を聞いていて思いました。
村田慎 委員	知り合いから聞いた話をさせていただくと、嫌がらせを受けたというのを先生に訴えた子がいたんですよ。そのやった子、加害者側の子に対しての指導を先生が学級活動の中で行ってしまって、最初、先生がみんなの前でずっと叱責をしているのをみんなに聞かせる。しかもその後にその子が何がいけなかったかというのを生徒に言わせているというのをさせてしまって、それがだんだん何がいけないかじゃなくて、その子がどんなところが性格

	でよくないとか、どんなところが嫌いかという話になって結果的につるし上げというか、その子が完全につるし上げで悪者になって、どうなったかと言ったらその子がもう学校に来られなくなってしまったということがあったというのを聞いたことがあって。向き合わせ方というか、その子たちに間違っって向き合い方を教えてしまうととても大変なことになってしまうとあって。向き合い方の一番最初の取っかかりを間違わないようにするためにどういうふうに先生がアシストできるかという、さっきの山吹小の件でも、お話を聞きながら先生が適切な向き合い方とか、サポートの仕方をされていると思ったので、それはこういういじめとか、けんかとか、こども同士のトラブルとか、全部そういうものに直結しているなというふうに思ったんですよね。どういうふうに向き合わせるかというのをアシストするスキルというのをもまた、ずっとここでも上がっているように、とにかくコミュニケーション能力をどういうふうにしたら上げていけるのかというのを、まず少しずつしっかり大人も学んでいかなきゃいけないんじゃないかなというふうに感じました。
遠藤洋路 教育長	では、ほかにご発言がなければ本件は以上といたします。 この後、議第44号、議第45号、協議1について非公開で審議を行いますので、傍聴人の皆様は恐れ入りますが、ご退出をお願いいたします。
遠藤洋路 教育長	すみません、総合支援課長から発言がありますので、お願いします。
吉里麻紀 総合支援課長	先ほどお示しできませんでたいじめの学年別の傾向です。 まず、小学校1年生が一番多くて700件台、それから小学校2年生、3年生が600件台、小学校4年生500件台、5年生400件台、6年生300件台ということで、小学校低学年ほど多いという結果になっております。 また、暴力行為の令和2年以前の状況ですが、平成29年は151件、平成30年が140件、令和元年度は197件となっておりまして、コロナ禍で一旦下がりますが、また上昇しているというふうな傾向があります。
苦野一徳 委員	すみません。現場感覚をお聞きしたいんですけど、低学年でいじめって、本当にそれをいじめと呼んでいいのか、法律の問題は

吉里麻紀 総合支援課長	あるんですけど、現場の先生方はどう思っているのかなという。低学年でいじめって本当にみんないじめと思っているんですかという。もちろんそういうものはあると思うんですけど、ちょっと感覚をお聞かせいただきたいなと思うんですけど。
遠藤洋路 教育長	現場の先生方もそこは悩まれているところかと思いますが、一応、いじめ防止対策推進法の定義に基づきまして、こどもや保護者がいじめというところで訴えがあればいじめというところで積極的に認知をするように数としてはなっております。
吉里麻紀 総合支援課長	積極的に認知してくださいというのは、低学年の先生だけでなく全員に言っているわけですよ。その結果、低学年がすごくたくさん出てくるというのは、これはどうなんでしょうね、先生の見立てとしていじめだと思われるような行為が低学年で多いけど、こども本人がいじめと思っているのもやっぱり低学年が多いという、そういうことになるわけですか。
澤栄美 委員	こどもの表現力もあるかとは思いますが、お友達とのトラブルがあったときに、〇〇ちゃんにいじめられたというような発言、それに基づく保護者の方もそういった理解であれば、いじめということで認知をするということに現在のところはなっております。
吉里麻紀 総合支援課長	いじめの調査があるんじゃないんですか。何かそれでこどもがいじめられたと上げてきているということのように私は理解していたんですけど。
遠藤洋路 教育長	きずなアンケートを行っておりますので、その中でいじめられたと書けばそこも上がりますし、日常生活の中でもそういった訴えがあればいじめということで件数を上げるような状況です。
	心のアンケートの結果もいつも教育委員会会議にも出てきますけど、それは無記名でこどもがいじめられたと言っている数が出てくるわけです。それも確かに小学校1年生が一番多くて、だんだん減っていく。
	今回のものは、こどもの無記名のアンケートではなくて、学校がいじめとして認知した件数ですよ。だから、こどもがいじめられたと先生に例えば相談したら、それは先生も認知するわけだ

吉里麻紀 総合支援課長 遠藤洋路 教育長	し、いろんな方法で先生が認知したものがここに上がってきていて、無記名で出てくるものが5,000件でしたか。 はい。 今回出てきているのが4,000件ということですから、かなりの程度、こどもの主観と学校側の認知は一致してきたんだろうなというふうには思いますけど。だから、こどもの主観でも学校側の認知度も、どちらにしてもやっぱり低学年がすごい多いということなんですよ。というのが、今先ほど聞いたのはそういう趣旨なんですけど。
澤栄美 委員	この認知件数というのはどんなふうにして調べているんですか。ちょっと私はそこがよく分かっていなくて。
吉里麻紀 総合支援課長	毎月学校のほうから今月のいじめの数というところで報告をいただいております。その数の年間の合計がこの数になっております。
澤栄美 委員	それは先生たちが認知したというところで上がってくると思うんですけど、きずなアンケートの中身を参考にして件数として上げているということは考えられないんですか。全く先生たちがそうだと思ったということですか。
吉里麻紀 総合支援課長	きずなアンケートで例えばいじめがあっているというようなことがありましたら、先生方、教育相談をされてお話も聞かれたところであると思いますので、関連性があります。きずなアンケートに上がったものがいじめとして認知されている場合は多くあると思います。
遠藤洋路 教育長	誰が誰にいじめられたということが分かっているのが認知されているものだと思うので、匿名で、いじめがありましたとかいじめを見ましたというだけでは認知はできないと思うので、そのギャップは件数の違いには出てきているんだろうというふうには思いますけど、こどもからいじめだという訴えがあったけど、それを認知していないということでは多分なくて、その事実が確認できたかどうかというところの違いなんじゃないかなというふうには思いますけど。

苦野一徳 委員	お尋ねしたい質問が、認知した以上、介入したということですよ。認知した以上、あなたはいじめをしたんだと名指すということでしょうか。
吉里麻紀 総合支援課長	指導は様々だと考えます。本人がいじめということで訴えているのであれば、いじめとして認知をしますが、決して加害のこどもに、あなたが加害者だよという、そういった指導ばかりではなくて、関係性の調整というような、そういった指導もあるかと思っています。
澤栄美 委員	私もちょっと納得したいのであれなんですけど。きずなアンケートって無記名だったですか。私もちょっと過去のことになって忘れたんですけど。中学校の印象でいうと、回ってくるんですよ、関係者に、ずっと1,000人分ぐらいが。その中で特に注意が必要なものに付箋がついていて、全部目を通すんですけど、名前があったような気がしたんですけど、違ったかなと思って、ちょっとそこは確認したいと。
吉里麻紀 総合支援課長	きずなアンケートにつきましては、名前の欄は確かにないです。心のアンケートは必ず無記名で行っておりますが、きずなアンケートにつきましては、気になることがある人は書いてくださいということで、相談をしたいというところで申し出る場所がありますので、無記名ではありますけど、実際に相談したいときにはそこにお名前を書くことも可能というところです。
遠藤洋路 教育長	5,000件というのは心のアンケートの結果ですよ。きずなアンケートは、私が聞いているところだと、学校によってやり方が違うので、無記名で誰が書いたか分からないところもあるし、実質的に誰が書いたか分かるようなやり方でやっているところもあるというふうに聞いたことがありますけど。
澤栄美 委員	何か先生たちがその状況を知るというのってやっぱりこどもの訴えからだと思うんですよ。見ていて、あれはいじめだなといって認知するというよりも、こどもの訴えからいじめというふうに上げていくと思ったので、この認知件数とその関係性というのが何か私の中でちょっとよく分からなかったもので、何回もすみません、尋ねてみました。すみません。

令和6年（2024年）6月 教育委員会会議録【6月27日（木）】

遠藤洋路 教育長

それでは、今の件は以上といたします。

【非公開の審議】

日程第4 協議

- ・（1）令和9年度高等学校入学者選抜について

《松岡美幸 指導課長 報告》

日程第3 議事

- ・議第44号 職員の懲戒処分について

《上村清敬 教職員課長 提出理由説明》

〔採決〕 【一部修正の上、承認された】

- ・議第45号 職員の懲戒処分について

《上村清敬 教職員課長 提出理由説明》

〔採決〕 【原案どおり承認された】

〔閉会〕

遠藤洋路 教育長

以上で本日の会議日程は全て終了いたしました。
以上で令和6年6月定例教育委員会会議を閉会いたします。